



竹中 尚文 様

お坊さんとケアマネさん



差出人 木村 晃子

竹中 尚文 様

寒い北海道からお便りします。立春が過ぎたにも関わらず、寒いのは言うまでもありません。そして、私たちの暮らす北海道で春を実感できるのは、当分先の話です。けれども、私の暮らす町は、いつもの年より、雪がとても少ないのです。ラクをしている冬です。秋頃から苦しんでいる50肩にとって、雪かきは大変つらい仕事なので、助かります。雪が少ないと言っても、降雪量は例年なみのようです。気温が高い日もあって、降っても解けるのです。(私の町の平均降雪量は、降雪深600センチ、積雪深140センチが平均値のようです。今年の積雪は、100センチないような印象です。)

さて、少ないと言っても外の景色は真っ白です。この世に映る様々なものが、真っ白な雪に覆われているのは、きれいなものです。雪の下には、春が待ち受けているのでしょうか。そんなことを考えながら、町外れを仕事の用事のため、車で走っていました。久しぶりの地域への訪問でした。そこは、10年来担当していた方が住んでいた地域だったので、懐かしくも感じていました。既にその方は他界されていて、私もその地域へはしばらく足を運んでいませんでした。以前によく訪問していたその家の辺りで、何かいつもとは違う感覚になりました。あれ?と思ったのです。車を一旦停めてみました。辺りは、一带畑です。はて?〇〇さん(以前担当していた方)の家は、ここにあったと思ったけれ

ど・・・無いのです。何度、目を凝らしても、辺りを見渡しても、その方の家が無いのです。家だけではありません。家の前にあった大きな、大きな木もないのです。その木は、樹齢100年は超えていたはずですが、あったはずのものが無いという不思議な感覚に包まれながら、目的の場所へ向いました。目的地に着いた時に、その家の話しを尋ねてみました。すると、誰もいなくなった空家は、地域の農家の方の農地となったことがわかりました。特別に珍しいことではありません。

用事を済ませた帰り道、もう一度その家があった場所を眺めました。その方との10年来の思い出が蘇るのです。頑固親父だったその方は、私に様々なことを教えてくれました。凄まじい戦争体験もありました。語り口調も内容もよく覚えています。けれども、その方と一体となって馴染んでいた家も木も無いのです。かろうじて記憶が、そこに家があったことを思い出せてくれましたが、来年になって、一面が麦畑となっている中で、再びその方の家のあった場所だと、私は気が付くことができるのでしょうか。一面に広がる麦畑の中に、記憶を想起する自信がありません。そう考えると、ふとしたさみしさがこみ上げてきます。

人は二度死ぬ、と聞いたことがあります。一度目は、肉体の死。二度目は、その人のことを覚えている人が一人もいなくなった時、と聞きました。人が死を恐れる理由の一つには、自分の存在が、残る人たちの中の記憶から消えていくことにあるような気がします。自分の存在が、肉体としても、生きていた事実としても消えていく・・・これほどさみしいことはないように思います。

『対人援助学マガジン』の27号の竹中さんの「七日参り」の中で、法身仏のことが書かれてありました。とても納得のいく仏様の存在です。私も父を亡くして一年以上が過ぎましたが、父の言葉は私の中にいつもでも残っています。そして、その言葉は、迷った時に私の支えになっているのです。父の肉体は亡くなくても、私は父のことは忘れることはないと思います。父のことだけではありません。両親の祖父母のことや、それにまつわる人たちのことが、時々思い出として、家族の歴史として語られます。人は二度、死なないように思うの

です。誰かの心の中に生き続けるように思えるのです。そういう意味では、先に記した、私が担当していた方のことも、住んでいた家の場所を思い出すことができなくても、その方が私に教えてくれた数々の事柄が私の中に残っている以上、さみしいと感じることはないのかもしれませんが。

では、生きている間、私たちは、どのように人と人との関係について記憶を持ち続けているのでしょうか。関係についての記憶とは、存在についてと、関係の中の細かな出来事に対する記憶をどのように扱うのか、ということです。

生きている間の人と人との関係では、円滑な関係だけとは限りません。そこには時として、利害やしがらみなどがあります。そのようなマイナスな煩わしさから、人は、人の存在を無いもののようにして扱うことがあるのです。ここに、確かに存在しているにも関わらず、透明人間のように扱われることは、人が人として在ることを否定されているようにさえ感じられます。それは、世の中に起きている差別的な問題から、個人間で起こる存在否定まで……。中々辛いものです。記憶という範疇の問題ではないように思います。

また、関係の中の細かな出来事もあります。辛さや悲しみの記憶は忘れてしまいたいものです。けれども、それらは、意思に反して記憶が強化されることがあります。嫌なことほどよく覚えている、というのは、一種の防御反応なのかもしれません。痛い記憶を持続させることで、似たような痛い記憶を引き起こさない……。などと考えてみましたが、やはり、痛い記憶は痛いものです。過去に捕らわれすぎていると、前進を妨げてしまいます。過去がどんなに辛くても、それはどうにかなることではありません。だとすれば、未来に向けた一歩を作り出すことが賢明です。今、という時間はやがて未来になります。つまり、今の中に未来に向けた希望が見いだせれば、過去の捕らわれから開放されるのかもしれませんが。逆を言うと、未来への希望が見つけられない時には、中々、過去から脱することは難しいものです。では、未来に希望を持つにはどうしたら良いのでしょうか。

あの世とこの世における、忘れる、忘れられない。この世の中で起こる、忘れる、忘れられないことについて、考えてみました。

季節の話題に戻ります。毎年、冬はやってきます。冬の厳しさには多少の差はあるものの、やはり雪国に暮らす私たちは、冬の訪れと共に春を待ちます。どんな厳しい冬だったとしても、春が来るとそれらは忘れます。1年の半分位は、雪との暮らしで活動も制限されますが、残りの半分はそんなことは忘れて活動します。めぐる季節の中で、期待を忘れずに生きていたいと思います。

春を待ちわびながら。

木村 晃子

2017年2月20日

木村 晃子 様

竹中尚文

拝復

雪が覆った真っ白の景色は、雪のない生活を送る者のあこがれです。私は雪かきの苦労もまったく知らずに、茶色い冬景色を眺めながら暮らしています。兵庫県でも寒さの厳しかった今年の冬がようやく峠を越えようとしています。私が住むところは、兵庫県南西部で、関西圏と瀬戸内圏の間のようなところです。早春の瀬戸内海もいいですよ。まったりとした気候で、もう淡路島の水仙も終わりの頃ですし、瀬戸内海西部の島々の柑橘類の美味しさは秀逸です。魚も種類が多くいろんな味を堪能できます。私は2月と3月の牡蠣が美味しいと思います。広島だけでなく赤穂も秀逸です。3月は播磨灘のイカナゴ漁です。この頃のしらす丼も美味です。焼き穴子も捨てがたく美味しいです。

大切な人を送っての旅は悲しいものです。島々の間に沈む夕日に涙するかもしれません。涙する日もあればこそ、笑う日もあるでしょう。大切な人を思いながら笑って生きるのは、少しばかり人生の味が違うのかもしれない。

木村さんのお手紙を拝読しながら、映画『フェノミナ』を思い出しました。私の好きなエリック・クラプトンの音楽がとても効果的に使われていて、いいテイストの映画だったと思っています。死を前にした主人公が、心を通わせた少年に語ります。自分が死んでいくことに、悲しみを覚えるでしょう。しかし、出会いによって少年の心に自分が残っていくことはとても嬉しいことだと話します。往く者は、送る者の記憶に残ることに安堵感を感じるのかもしれない。

最近の巷では、終活と言って、自分の葬儀はどうするなどと言っているようです。葬儀の規模や葬儀社はどこにするということのようです。墓の要不要も言っているそうです。中には、生前に葬儀社を回って、予約をして、それをメ

モに残したりする人もいます。そんなことは、残った人たちに任せておけばいいと思います。愚かな行動だと思いますが、こんなことをする人の多くは死んだら終わりだと思っているように感じます。死を前にして、どうしていか分からず、オタオタと愚行をしているように思います。

数日前に、あるお爺さんが亡くなりました。彼には、奥さんと娘さんがあります。十年程前のことですが、お参りの折りにこんな話がありました。娘さんの大学卒業の頃でした。娘さんは、生家を離れて都会で大学生活を送りました。奥さんが、

「あの娘は、都会が好きやねん。この田舎には帰ってこない」と。

「おまえ、あの娘が帰ってこなくてもいいじゃないか。あの娘は都会が好きだったらそれでいい。娘が幸せだったら、それでいい。われらはこの田舎でそつと死ねたら本望や」

「それは、そうや」

忘れがたい会話でした。そして、先日このお爺さんが亡くなりました。昨日、ご近所の方に、このお爺さんは最近、夜が眠れないと言っていたと聞きました。少し年の離れた奥さんのことを思うと心配で眠れないと言うのです。一人残していく奥さんのことを案じていたそうです。

人生の末期にあたって、後に残していく人たちの幸せを願い、心配をしている、というのが、終活であるのでしょうか。そこには、葬儀社をどこにするかというような明確な形がありません。しかし、思いを残していくことができます。その思いを受け止めることが残された人々のなすべきことです。それは、死んだら終わりというのではなく、死から始まることだと思います。

もうすぐ春です。

合掌